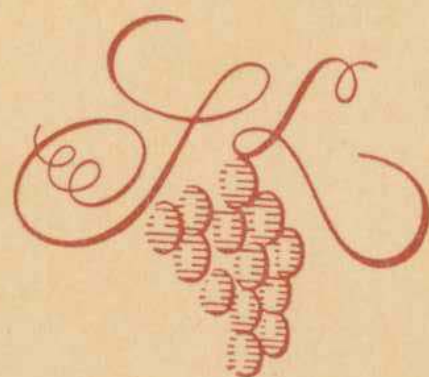


新潮文庫

ゲーテ詩集

高橋健二訳



新潮社

ゲ-テ詩集 し しゅう



定価はカバーに表示してあります。

新潮文庫 黄4A

昭和二十六年四月二十五日 発行
昭和四十二年四月二十日 三十三刷改版
昭和五十一年五月三十日 四十七刷

訳者 高橋健二

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)(二六六)五一一一
編集部(〇三)(二六六)五四二一
振替 東京四一八〇八番

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

⊕ 印刷・東洋印刷株式会社 製本・有限会社加藤新栄社

© Kenji Takahashi 1951 Printed in Japan

新潮文庫

ゲーテ詩集

高橋健二訳



ゲーテの作品は豊富多彩をきわめているが、彼の真髓はやはりその抒情詩じよじょうしにある。その戯曲や小説も抒情性が大きな魅力になっている。だが、彼の詩業は狭い意味の抒情詩に限られず、物語詩、思想詩、哀歌、ソネット、格言詩、等々あらゆる詩野に及んでいる。従って、ゲーテの詩集は、つきざる泉にも、無限な鉱脈にも比較される。数巻にわたるその詩集には、接するごとに、こんな美しい詩があったのかと、たえず新しい発見をして驚かされるのである。また、親しみ慣れた詩でさえも、味わい直すごとに、新しい美しさと響きと意味とを見いだして、大きな喜びを覚えるのである。そこには、純情の恋あり、哀切の涙あり、激情のたぎるあり、知恵の深く澄めるあり、寸鉄の言あり、悲しくまたおかしき物語も乏しからずというふうで、まことに書物の中の書物といっても、だれか過言なりととがめよう。それだけに、質量ともに豊富なゲーテの詩を小さいわくにはめることは非常に困難であるが、他面から言うと、それほど多種多彩多量であればこそ、かえって抜粋が必要であり、有意義であるとも言えるのである。ゲーテの詩を一度に全部味わうというようなことは、不可能だからである。

それでここには、抒情詩を中心として、物語詩、思想詩などの代表的なものを、年代順に排列し、ゲーテの生活を背後に感じつつ、この宝庫を味わい得るようにした。なおこの訳詩集について多くのことを費やす代りに、ゲーテがその詩集の序として書いた詩をかかげておきたい。

心やさしき人々に

詩人は沈黙することを好まない。

あまたの人々に自分を見せようとする。

賞賛と非難とは覚悟の前だ！

だれも散文でざんげするのは好まないが、

詩神の静かな森の中でわれわれはしげしげと

バラの花かげに隠れて、こっそり心を打明ける。

わたしが迷い、努め、

悩み、生きたことのくさぐさが、

ここでは花たばをなす花に過ぎない。

老いも若さも、

あやまちも徳も、

歌ともなれば、捨て難く見える。

目次

青年時代（ライプチヒ、フランクフルト、シュ
トラーズブルク、一七六五—一七七一）

わが歌に……………	六	私がお前を愛して……………	六
婚礼の夜……………	七	灰色な曇った朝……………	九
幸福と夢……………	九	会う瀬と別れ……………	三
喜び……………	一〇	色どられたリボンに添えて……………	三
月の女神に……………	二	すぐにまたリクヘンに会える……………	四
そら死に……………	三	五月の歌	
川べにて……………	三	（なんと目ざめるばかりに）……………	三
金の首飾りに添えて……………	四	目ざめよ、フリーデリケ……………	九
わかれ……………	五	野の小バラ……………	四
めくら鬼……………	七		

ヴェルテル時代（フランクフルト、ヴェッツラー、
一七七七一―七五年）

ジプシーの歌……………	四	ガニメート……………	六二
すみれ……………	四	専門家と熱情家……………	六四
作者……………	四七	プロメートイス……………	六七
クリステル……………	四八	新しい恋、新しいいのち……………	七一
新しいアマデイス……………	五一	愛するベリンデへ……………	七三
不実な若者……………	五三	山から……………	七四
ツォレの王……………	五五	悲しみの喜び……………	七五
心の落着き失せて……………	五六		

ワイマルに入りて（一七七五―八六年）

首にかけていたハート形の 金メダルに……………	六	空気と光と……………	八〇
狩りうどの夕べの歌……………	七	リリー・シェーネマンへ……………	八一
		旅びとの夜の歌	

(空より来たりて)……………	八三	千変万化の恋人……………	一〇三
憩いなき恋ごころ……………	八三	旅びとの夜の歌……………	一〇三
シュタイン夫人へ……………	八三	(山々の頂に)……………	一〇六
(ああ、そなたの)……………	八四	夜の思い……………	一〇七
裁きの庭で……………	八五	立て琴ひき(孤独に)……………	一〇八
省察……………	八六	魔王……………	一〇九
月に寄す……………	八七	歌びと……………	一一三
いましめ……………	九〇	立て琴ひき(涙と共に)……………	一一五
遠く離れた恋人に……………	九一	神性……………	一一六
漁夫……………	九二	ミニヨン(君や知る)……………	一二〇
人間性の限界……………	九四	会合の問答遊びの答え……………	一二三
水の上の霊の歌……………	九七	同じ場所での……………	一二三
公理……………	一〇〇	さまざまな気もち……………	一二五
ねがい……………	一〇〇	初恋を失って……………	一二八
すぎない娘に……………	一〇二	ミニヨン……………	一二八

(ただあこがれを知る人ぞ) ……一三九

シュタイン夫人へ

(私たちはどこから) ……一三〇

コフタの歌 ……一三一

イタリア旅行以後 (ワイマル、一七八八—)

訪ない ……一三四

ねずみを狩る男 ……一四六

朝の嘆き ……一三六

花を与えるのは自然 ……一四八

恋人よ、おん身は ……一四三

海の静けさ ……一四九

甘き憂い ……一四三

幸ある船路 ……一四九

このゴンドラを ……一四三

ミニヨン(語れとは) ……一五〇

どんな娘を望むかと ……一四四

立て琴ひき(戸ごとに) ……一五一

人の一生が ……一四四

フリーーネ ……一五三

凡そ自由の使徒というものは ……一四五

契つた人に ……一五五

王も扇動者も ……一四五

恋人のかたえ ……一五七

熱情家はすべて ……一四六

いつも変らなくてこそ ……一五八

狂える時に会い ……一四六

何ゆえ、私は ……一五八

すべての階級を通じ	一五九	慰めは涙の中に	一九三
宝掘り	一五九	一番幸福な人は	一九四
残る思い	一六二	金鍛冶の職人	一九五
ミニヨンに	一六三	花のあいさつ	一九七
伝説	一六五	五月の歌(小麦や)	一九八
小姓と水車小屋の娘	一七〇	フィンランド調の歌	一九九
独り者と小川	一七三	ふとんの長さに従って	二〇〇
かの一なるもの	一七六	千匹のはいを	二〇一
リーナに	一七六	耳ある者は	二〇一
いち早く来た春	一八〇	世の中のものは何でも	二〇一
思い違い	一八三	われわれを最もきびしく	二〇三
さむらいクルトの		見出しぬ	二〇三
嫁とり道行き	一八四	自分のもの	二〇四
羊飼いの嘆きの歌	一八七	スイス調の歌	二〇四
あこがれ	一八九	かつて鳴り出でしもの	二〇七

詠嘆の序詞……………二〇七 似合った同士……………二〇八

西東詩編以後（ハイデルベルク、ワイマル）
（一八一四—三二年）

形づくれ！ 芸術家よ！……………	二二二	知恵を……………	二二八
ひともとのさとらきびも……………	二二三	われわれは結局何を……………	二二八
みずから勇敢に……………	二二三	安らかに寝る……………	二二九
ふたりの下男を……………	二二三	ズライカ……………	二二九
歌ったり、語ったり……………	二二三	愛の書……………	二三〇
好ましいものは……………	二二四	真夜中に……………	二三一
死せよ成れよ！……………	二二四	泣かしめよ……………	二三三
私は甘い希望で……………	二二五	詩作を理解せんと……………	二三三
五つのこと……………	二二五	星のごとく……………	二三四
他の五つのこと……………	二二六	われわれにはいろいろ……………	二三四
最もよいこと……………	二二七	私が愚かなことを……………	二三五
処世のおきて……………	二二七	うぐいすは久しく……………	二三五

ああ、見上げるばかりの……………二二五
シラーの頭蓋骨をながめて……………二二六
及ばざりき……………二二八
バラの季節過ぎたる……………二二九

閑寂の趣を……………二三九
花婿……………二三〇
つつましき願いよ……………二三一

注……………二三三

ゲ
ー
テ
詩
集

青年時代

(ライプチヒ、フランクフルト、シュト
ラーズブルク 一七六五—七一年)